



第39号



山口浜屋税理士法人

東京都日野市豊田4-35-6  
アトラス豊田201

TEL 042-586-9050



日野市にて  
職員（白子）撮影

代表社員 浜屋 浩

## 通奏低音

「パッヘルベルのカノン」という曲をご存じでしょうか。ヨハン・パッヘルベル（1653～1706）は、バロック期のドイツの作曲家でもあり、オルガン奏者でもありました。この曲は「カノン形式」と「通奏低音」が特徴です。カノンとは、ひとつの旋律を複数の声部が時間差で模倣して演奏

する音楽形式のことです。また、通奏低音（Basso continuo）は、この曲の土台を形成する反復する8つの音のベースライン（コード進行）です。この進行が曲全体を通して繰り返され、安定した基盤を作っています。シンプルさと繰り返しの中に美しい変化があり、聞く人に安心感を与える旋律です。普

遍的なコード進行やパッヘルベルのベースラインは数世紀を経てもなお魅力的で、現代の音楽にも通じる普遍性を持っています。

また、人は音楽以外にも、文章やスピーチといった言葉の表現に触れた際にも安心感や信頼感といった気持ちを感じ

ずることがあります。それは、書き手や話し手の言葉の背後にある価値観に共感できたときではないでしょうか。

そのため、文章の中には、信頼性を高めるための仕組みが用意されていることもあります。例えば、研究論文には「査読」というプロセスがあります。査読（Peer Review）は、学術論文や研究成果を発表する前に、同じ分野の専門家による厳密な評価・検討を受けるプロセスのことを指します。主に学術雑誌や学会での発表前に行われ、研究の質や信頼性を確保するために不可欠な手続きとなっています。査読のプロセスでは、

- ・研究内容がこれまでにない新しい知見を提供しているか
- ・研究データや手法が適切であり、結果が科学的に妥当か
- ・議論や結論がデータや分析に基づいて適切に構築されているか
- ・論文が明確で読みやすく、規定されたフォーマットに従っているか

などが検証されます。査読は学術的な信頼性を確保し、研究分野の発展を支える重要なプロセスとなっています。

しかし、実際に私たちが接する情報の中には第三者のチェックを受けていないものも

多くあり、その真贋を見極めるが難しいこともあります。そのときには、情報の発信者が観察している対象と、そこから結論をどう導いているかに注目することが必要になってきます。

経済学者のアダム・スミスは、主著のひとつである『道徳感情論』の中で「公平な観察者」という言葉を用いました。公平な観察者（impartial spectator）は、倫理的判断の基盤を提供する概念です。スミスは、私たちが自己の行動や感情を評価する際に、偏見や利己心を超えた「第三者的な視点」を持つ必要があると説きました。公平な観察者は、実際に存在する他者ではなく、私たちが心の中に思い描く客観的で中立的な存在です。この視点を通じて、個人の行動が他者や社会全体にとってどのように見えるかを考えることで、公正で倫理的な選択が可能になるとされています。

「通奏低音」と「公平な観察者」はふたつの点で似た役割を果たしています。ひとつは中立的であることです。通奏低音は旋律や装飾の主役ではなく、裏方として全体のバランスを調整します。

同様に、公平な観察者も個人の感情や利害に偏らず、中立的な立場を保ちながら倫理的判断を導きます。

もうひとつは普遍的な枠組みであることです。通奏低音のコード進行は時代や楽曲を超えて広く適用される普遍的なものであり、公平な観察者も特定の文化や価値観に依存せず、人類共通の倫理的基盤を提供するモデルとして機能します。

これら両者が示すメッセージは、現代においても重要であると思います。個人主義が高まり、多様性が重視される現代社会では、全体を統一する枠組みが失われがちです。しかし、バロック音楽の通奏低音やスミスの公平な観察者のように、自由や多様性を可能にする基盤を意識することで、個人と社会の調和を図ることができるのではないのでしょうか。

私も通奏低音のような安定感・安心感と、公平な観察者の視点を持ち続けたいと考えています。

（浜屋 浩）

